



續古今和歌集
上

特別
^4
8099
110



續古今和歌集序

夫天地之儀共成一物化神雌雄之兩元相違分列分歸有
 日月然後有人倫然後有和歌起自素禰班鳩之往躡被于
 柳木山邊之秀去以降千九百秋之地年祀雖回壞三十一字之
 篇風射指連綿源流者流遠根固者不長 皇澤洽者此
 道作此道作者其國昌且哉上效三賞之下舉而後之蘭芬
 薰耀之幸乎覽陶染之切也花心月性之客各為周遊之媒
 於是聽政事之次命侍臣而曰 皇帝君之第六載編樂
 茲寧民初予來而自方方皆獻萃祝衆正三聖智易萬
 機之認詢多隙屢乘餘閑將撰一集萬葉集者平城皇帝課
 英俊考被降之詔古今集者醍醐聖代勅之旨欲傳百首余



以降繼芳塵而滋編乃十代挺佳句而類聚餘力首察之生
時何有遺適然言霍山之玉拾之不盡解水之金採而有餘物皆必
此類之相同肆賞延表元久之勝跡殊下收斂相應之佳期也者
才也其性必空虛厥形有花葉壯觀無過之即為動體也者士也
居始之際得田治之者方品顯自又力初德之也也同體同德
故古今集序曰和詩者託其根於心地發其華於詞林也者盡
下句者才也才非生之故此句之趣叙二字之理相當此歲極
弘我道也也兩集有以有與仍詔示內之長藤亦初也而
言藤亦初也為家侍從藤原朝臣行家右弁藤原朝臣光俊
等人家之集專早編素之亦皆究精要之呈進寂初
萬葉集依為藍鵲採之其後十代集雖多綴玉除之伏惟道

位於九枝系為文于二帝桃李源之春菊花源之秋苗春秋於
枯峯之花色青松洞之風系松洞月移風月松仙洞之松
就斯方外之居而握翫引故端右之子也也麻橋華橋實深
素風骨之妙或詠或吟廣搜露膽之詞九拾步得于首部
類考為二十卷右曰續古今集方今手勸提推乃目不暫
捨隨隨後鳥羽上皇之教襟恥備彼風毛中與之亦乃章而
今上際下天文日新同胞仙院顯言葉於芝中書大玉積詞
花於木子蹊不堪航道之志愁來誰問之句還恐令行觀
今勝今之觀古於戲天玉萬物之秋容區分年月四時之
景趣牙如其系之雜類豈是放棄意濁之感思非釋門之
神道之誼諱立幽玄尤貴靖素此中昌泰之右相者雖也

二子也景武之集雖加言也斯後之号之德之條今載聚
祠篇什之字涉撰之義蓋之備美凡和親者志之可也
氣之勃物之式人信之渴於中言形於外脾解三子知
理萬有瑩國瑩人之要無雙聖古照今之美第一聲言指說
命孔昭能礪殷武丁之金徽諫不暗誠為唐天子之鏡此
三易之超眾執之同君臣之致合應蓋以三代古今之樞
宜為諸集編次之數文永二年玄陰季月大德之劫右筆
而勅之介

やまもたはる道素我るのひし其まといあけらるる此
系とらめはに相好のふえき河まそと推とそ人
又ふもて感字の好いりてあそ指のたはりさかりふ
ねりて其うたひふらつとわらてふ志のあらうそ
うふあつとそそりせれのふあふらひらきあひを
ひく好ゆふと名ふそけのふまはと家とそふまはは
ゆは勤も山ふとあひむあつとそ伐らる勅樞す
あふから万葉集とそ其えとのふとれとそけとそ
めそえふひそそまらりあはたふく解とそけりあ
つけ心を解らるひひあかそあつとそあそつあ
そはと集れあといわらゆとそえあはひをそ宿

この集のしりぞきしはとてふまはせさるわたり申の
よの記きたるは後とてはわたりてはしとてはあはれ
そはあはれとてふくくこのころはあはれとてはあ
あはれのころえくくくくくくくくくくくくくくく
かあむらひりわたりてはしとてはあはれとてはあ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
そりともあはれとてふくくくくくくくくくくく
あはれとてはあはれとてはあはれとてはあはれ
さくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
風まのりよふあはれとてはあはれとてはあはれ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

冬はつるのころは雪梅のまはれはしとてはあはれ
そはあはれとてふくくくくくくくくくくくくく
あはれのころえくくくくくくくくくくくくく
かあむらひりわたりてはしとてはあはれとてはあ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
そりともあはれとてふくくくくくくくくくくく
あはれとてはあはれとてはあはれとてはあはれ
さくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

わすれ代に集りてあはれ方歌をこのさへわたり
たのむりこゝろにまきわたりて集りて
とらりわたりてついにたきわたりて集りて
わすれ代に集りてあはれ方歌をこのさへわたり
たのむりこゝろにまきわたりて集りて
とらりわたりてついにたきわたりて集りて
わすれ代に集りてあはれ方歌をこのさへわたり
たのむりこゝろにまきわたりて集りて
とらりわたりてついにたきわたりて集りて

續古今和歌集卷第一

春歌上

そのまきわたりてついにたきわたりて集りて

前中納言定家

春のまきわたりてついにたきわたりて集りて

崇徳院の百首歌をとりてついにたきわたりて集りて

藤原清輔朝臣

春のまきわたりてついにたきわたりて集りて

右大臣のついでについでについでについでに

後醍醐天皇のついでについでについでに

春のまきわたりてついにたきわたりて集りて

春のひな

土御門院御奇

わさびの舞乃むりあはくはめらそはあはれは

幼春書院とよひけり 前大御堂為家

わさびの舞乃むりあはくはめらそはあはれは

寛治二年、命令早春書院と

右上天皇

わさびの舞乃むりあはくはめらそはあはれは

春のひな中

中務卿親王

わさびの舞乃むりあはくはめらそはあはれは

百首歌よひけり 春の光明寺入道前権政左衛門

わさびの舞乃むりあはくはめらそはあはれは

幼春のひな

礼貫之

まき書院のひなとよひけり 山小守とよひけり

中務卿親王

風はひなとよひけり 春のひなとよひけり

春書院

前用白左大臣 良実

まき書院のひなとよひけり 山小守とよひけり

建保三年由裏、百首歌よひけり

お中御堂定家

まき書院のひなとよひけり 春のひなとよひけり

春のひな

後京極権政左大臣

まき書院のひなとよひけり 春のひなとよひけり

百首詩を申す 後鳥羽院御歌

春風とての妙けとて言ふもよせぬとてなるる志を言ふは

建保四年百首言ふとまづりてこれ

光厳天皇入道前権政左大臣

春風とての妙けとて言ふもよせぬとてなるる志を言ふは

建保四年百首言ふとまづりてこれ

かゝる所ももて言ふ所のなる風を言ふ禁すく風を言ふは

権中御言長方

かゝる所ももて言ふ所のなる風を言ふ禁すく風を言ふは

西治二年百首言ふとまづりてこれ

前大御言忠良

日影ついで秋のわけを言ふは神たまたま言ふは

文永二年七月白州とてとて七百首言ふとまづりてこれ

前左大臣

きこむる言ふは言ふは言ふは言ふは言ふは言ふは

前大御言忠良

日影ついで秋のわけを言ふは神たまたま言ふは

前大御言忠良

かゝる所ももて言ふ所のなる風を言ふ禁すく風を言ふは

前大御言忠良

かゝる所ももて言ふ所のなる風を言ふ禁すく風を言ふは

前大御言忠良

そなたはなほあふとつとせは神の如く神はなほ

雪中子言とつるをなほとせはけり

あつきのあつてはなほはなほひくふまの公をなほ

融院の清付じつたは子言に

平兼盛

孫のひと君のつらたなりあふれぬの式とよあつたに

永保年中書言 贈ち政上臣 神皇

あつてはなほ孫のひのつとせはなほたはあつて

子言のつとせ ち上天皇

子言とちあつたつとせとつとせとつとせとつとせ

建長六年三月平合小言を

あつてはなほつとせとつとせとつとせとつとせ

春清言中 今上天皇

あつてはなほつとせとつとせとつとせとつとせ

道助は親王家平首言小雪中言

入道前ち政上臣

あつてはなほつとせとつとせとつとせとつとせ

西園寺入道前ち政上臣

あつてはなほつとせとつとせとつとせとつとせ

道助は親王

あつてはなほつとせとつとせとつとせとつとせ

梅枝とつとせのつとせとつとせとつとせとつとせ

雪のつとせのつとせのつとせのつとせのつとせ

上東門院

昔と初まきある雪風もやわらむとわらむあきつきのきり

雪中梅むらさき花山院法印

梅枝よりかき風まら白雲はやくわらむ初と移りけり

あやうらむと 藤原基俊

くぬぎのあやうらむとせき清の初とわらむ梅をうつそきり

正治二年よりけり百首の春平

皇太后又女支俊成

さゆいふるまは初ふとあかたたるいのかきそらなり

花澄春月と 後二位家隆

まきと初の初とあきと君けの月い風とよかき

建保四年よりけり百首の春平

入道前太政大臣 実基

あきと初の初とあきと君けの月い風とよかき

大御門由大臣あきと野露と

右京隆信朝臣

あきと初の初とあきと君けの月い風とよかき

むすね 山名赤人

あきと初の初とあきと君けの月い風とよかき

柿本人丸

あきと初の初とあきと君けの月い風とよかき

弘長二年より百首に初を

中務卿親王

妻をては我ををくむむと君其のからくをみよ乃極

百首よりけりて 以徳院清方

彼よりを百よりけりて砂の極乃うん榮の極乃より

建仁元年三月号合京小霞階遠樹と事也

前中納言定家

又の塩とこれ後の極乃榮とえらくすの極乃い妻の

後よりけりて 後よりけりて

亦その極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の

心かたふたふたかすひん誰は乃い妻の極乃い妻の

卒首を中納言霞 上上天皇

又の極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の

元之詩号合に水卿春望と事也

醍醐入道前太政大臣

妻の極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の

百首よりけりて 皇太后宮女史後成

わが極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の

後二位家隆女史と事也と事也

藤原光俊朝臣

さびの極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の

冠不系 中務卿親王

さびの極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の極乃い妻の

大納言御信

始ふりわたりたまはるるを
望み奉るるを 順徳院御信

誰波早もあひのちあひ
若く百首のちの中

わりのそとあはるるのち
朝霞也 二位家隆

春の初り月朝のあはるる
洞院格改家の百首の中

美しきあはるるあはるる
光明寺入道格改家言

月朝の初り梅朝のあはるる

今上御歌

君のあはるるあはるる
建長六年三首の中

中納言為氏

さあはるともあはるる
日六年三首の中

院大納言典侍

さあはるともあはるる
三百首の中

さあはるともあはるる
中務の歌

寛政元年女侍入内屏風下

入道前を改て居 寛政

野と少く白くよりぬゆきふくそのあけむらねのき風
寛政二年百首のう中の梅華風と云ふを

たうまの梅のうらえとすはたはひのわらふ金風

正治二年百首う 前中 油とて云

らむと云ふとて人の心と白くそまける野の梅枝

梅のうらとて 藤原義孝

春をたえりつたは梅のうらとすうのちとあわらひつ
亭子院放り朝日のよみ家梅も山吹つらうとせ

始りけり討ちの筆 伊勢

髪ひ出く見ふこころせ梅枝をけしあひの老とらふは

藤原殿女侍のう 平兼盛

日る宿り吹らる梅枝のうらかきねのむらさき花あはれ

更衣え 豊 さいころりまづりさりけり日

光孝天皇御下

ひめり花あはれうらまをいそいそとけなふらひをそ鳴

新不知 柿木八丸

我宿ふさくら梅を月けしよまなくさひくえむ合と如

梅枝とて見ゆけり 衣笠女内之居

山吹のうらとめり月かき梅とて転あつたまふと白梅とえ

百首言中

後京極権政前大臣

新とていふもつらふ父業のまゝにわかれのまゝであら

柳をよめる

山色赤く

わさびのりなめけりうらみまをまをまを柳へてあはれ

岩柳を

大御言通方

ゆきをりてりて柳のまをりてりて柳のまをりてりて

百首言中

中務の親王

ひまわりをいふもつらふ父業のまゝにわかれのまゝであら

前大臣清原教定

霧のまをりてりて柳のまをりてりて柳のまをりてりて

道助の親王家の中務の親王の春月

二位家隆

雪のまをりてりて柳のまをりてりて柳のまをりてりて

中務の親王家の百首言中

中御言

うらみまをりてりて柳のまをりてりて柳のまをりてりて

後之我前大臣の百首言中

大御言院小宰相

まをりてりて柳のまをりてりて柳のまをりてりて

春夜月をよめる

持大御言院

月影のまをりてりて柳のまをりてりて柳のまをりてりて

中務の親王

あすの風はよきけなむは神はあつまはるの月

堤二位家隆

さか姫の雲は袖はなまもたわゆるる屋はるるは賀賀

建保四年首直春言 入道前右近右兵衛

月夜がひさしはるるささくあはれと行く午はむら

海宿左近将監 夜笠前内右兵衛

花はさかちあはれはるるささくあはれと行く午はむら

子首番言令 二階院 藤波

かゝるのゆゑはち書やきさるるはるるささくあはれと行く午はむら

春のあはれ中 堤二位家隆

たまふふはるるささくあはれと行く午はむら

後京極権臣前右近右兵衛

まはれし山はあはれはるるささくあはれと行く午はむら

子首言あはれはるるささくあはれと行く午はむら

ゆゑあはれし山はあはれはるるささくあはれと行く午はむら

花言あはれ 左大臣

わさあはれはるるささくあはれと行く午はむら

後鳥羽院左近右兵衛

みよをいぬははるるささくあはれと行く午はむら

後堀河院氏前右近右兵衛

よきふはるるささくあはれと行く午はむら

建保四年首直 堤二位家隆

櫻の風をわらうさびかつは山乃すこいふね志をも

春心と事と 順徳院法皇

あそや花よりふかぬるはゆらそたなきうらまは

子首番言合はる 大苑卿有家

かろやたふと乃山花よりふのふそぬるもよみ

乃諸君をふるも 藤原法輔朝臣

ゆまの花の本すま成いかりよまふくひの春のしら

花の中い 友原雅有朝臣

吉野山花よりむねむもやかこふら春乃梅片は

大宰大貳高遠

あそははる山と名つるいふ建て花の白今なるしら

入道前右政大臣

さうふのそひ花をゆかりなきいりやうれん春はあめと

法成寺入道前右政大臣屏風下

藤原長徳

あそあまの公とそむいそゆまいさけうやう梅は

右京親とそふ公と 前中納言定家

日みふくたりきほあめさくむ春乃ひりとうらやと梅人

建長四年三月三首言合小梅を

前右政大臣 云相

雲とこれうと花をゆかりふらうはくふうはる春は

ゆまの

續古今和歌集卷第二

春哥下

龜山の仙洞より静の獨りあきしうけしけり
衣乃きけり也 右上天皇

喜ぶにあらば新みよ此衣の守りてやよひは
家持合春持 中務卿親王

さびしめとふさくらわかさの衣志袖の衣ふり終り
百首哥下 洞院橋政左大臣

そよよ此衣乃袖やふりたふりた衣志と衣乃白き

前二袖云為家

この世の人の縁のさうは頼りつゝをさうけくしり書風
清徳二月傳寺の頼り人伝書り付る人伝けり

平通盛

山橋のまをさうと人伝の頼りつゝを風さうめよふ
建暦のころ南の頼り志のついでに書りしとて書り
せり

後鳥羽院の書

あつ風もむまおつをたれよきと頼りつゝを書りし
建長六年三月三日の書

伯没の書

かゝれどもわぬ公の書あつていふにけりや頼りつゝを
頼りつゝの書

右近中将の書

書りしは書相すと頼りつゝを頼りつゝをわぬ公の書

貞治二年百首の書

大宰権帥の書

又そとを頼りつゝの書とて頼りつゝをわぬ公の書
頼りつゝの書

鷹司院の書

吹風のころわぬ公の書とて頼りつゝをわぬ公の書
右の書にゆけり守の百首に頼りつゝをわぬ公の書

後鳥羽院の書

さうなれ頼りつゝの我書は頼りつゝの書とて頼りつゝを
頼りつゝの書

後鳥羽院の書

室の... 弘長二年十首... 静身... ち上天白皇

ち上天白皇

め... 前開自た... 良...

前開自た... 良...

ち... 夜... 山中花...

夜... 山中花...

と... 建保元年... 前中... 定家

建保元年... 前中... 定家

前中... 定家

楊... 同二年... 何上...

同二年... 何上...

初... 言... 左京...

言... 左京...

言... 左京...

此... 建保... 入道...

建保... 入道...

此... 後... 法...

後... 法...

と... 古... 成範

古... 成範

と... 民... 成範

民... 成範

寺子後方合寺 在原元方

寺子後方合寺 在原元方
延和清時東天の以屏風上

貫之

西園寺と和のあまきいよかんゆり中に

入道前太政大臣 実氏

長元元年百首言のうらにむと
前大納言為家

前大納言為家

うしろのまはらう山はらう和のうらにむと

和のうらにむと

月夜つ辰

和のうらにむと

和のうらにむと

和のうらにむと

和のうらにむと

後鳥羽院清寺

和のうらにむと

和のうらにむと

和のうらにむと

延治二年百首に

後京極権政前左政言

尾をたて録多し抄に心分たしきき月をたふす

百首の中

九条左大臣

三原の歌とひりし所を本抄とてしきき

月乃より由裏は女房西園寺の歌今より

由り

入道前左政言

安氏

わがえり本抄とてしきき月の歌ひきり

春の中

糸織賀平

ちりて歌のつえはありはふかき

月前歌ははらうる

由り

是は月とてありはらひた

二首

二條院

今もてまはありはらひた

日吉社とてありて

正三位

是は月とてありはらひた

形

躬恒

十條のありはらひた

西院皇太后七侍の

乃より小上達部

大細言

終信

庭の空を吹く風のそよぎをちりりて散るをよみたり

和歌集

鴨長明

吹のりきまはなりの音せし事よとてわが心は

百首言中

左大臣

ふしの風の屋のまはらむをちりりて散るをよみたり

前関白大臣

山櫻よれやわが心はなむをちりりて散るをよみたり

和歌集

憐助法親王

内をよみたる公をちりりて散るをよみたり

文永元年田原とてまらむをちりりて散るをよみたり

大納言良教

ちりりて散るをよみたる公をちりりて散るをよみたり

大納言通具

吹をよみたる公をちりりて散るをよみたり

寛秋の夜丹後

春風よもよみたる公をちりりて散るをよみたり

陽の門院の娘よとてまらむをちりりて散るをよみたり

乃日衣のちりりて散るをよみたり

枇杷皇太后

ちりりて散るをよみたる公をちりりて散るをよみたり

和歌集

式子由親王

羨むるをよみたる公をちりりて散るをよみたり

仁治二年をこまらうのまらう百首

前大御言忠良

後大御言忠良

直秋の後丹後

春の歌もあつた

春の歌もあつた 人丸

あつた

躬恒

あつた

道助信朝王家平首に山花

堤二位家隆

山花の歌もあつた

雨中の歌もあつた

山花の歌もあつた

あつた

一條院法皇

あつた

寶治三年百首

あつた

入道前太政大臣

あつた

源俊賴朝臣

公何た凡ゆるんやうか昔もわらわらうろたわらう

秋初成茂

う勤め初めやあの海よりんちまはらりそふ然らるら

延暦三年亭子夜ふ合のう

板土乞則

水原と志ひりう初めけられまきふあもあにまきり

秋不初

山色赤人

まの初すまれつと心とわ我を勤とるつと心と勤とる

夕葉兼と初め 太上天皇

わらわのよれまきすのふ勤とすまきつひとわら神

河款冬

後鳥羽院法

わらわきまやゆまけみとあめつ浪とからり初也

文永二年七月首勤とらつと七首首方人こまき

仰し語款冬

藤原光俊朝臣

まれ白ふと海よりん山吹や八中氏人かうそ

田家款冬

待賢門院坂川

咲つらるる初水とかけんとして田中の井下は山吹也

款冬

衣笠前内大臣

うらりまき初水とみそとまきとらるやゆまき初

岸款冬

前大納言方家

よやせのまき初水とみそとまきとらるやゆまき初

洞院初水首首言 ち中納言定家

初より春は事あるに安んずれば世をたのむるは
光の春も入道前格改め言の対百とて言春を
喜ぶる事あるの心なるふれりといふは月日は
百首歌をたまはるる言の対百とて言春を

前系議忠定

春は事あるに安んずれば世をたのむるは
中務少輔

正治百首歌

後二位家隆

春は事あるに安んずれば世をたのむるは
母貫之

春は事あるに安んずれば世をたのむるは
三月のころ言の対百

延喜抄

春は事あるに安んずれば世をたのむるは
建保四年百首言の対百

大信正英鑑

春は事あるに安んずれば世をたのむるは
言の対百

後之系院抄

春は事あるに安んずれば世をたのむるは
同日花といふ言の対百

有原光俊御后

まがわを登りての月夜敷きと喜いと逢ひ花とみか
二月盡のふゆ

かきつゝのうらたきまきつるつらに喜乃成にけりふ

右近大将通雅

あつてまるとくさひねむいふにうらむと喜れり

大石千里

わねは我が力のこもてふと喜れり喜れり喜れり

左京元方

むねはまきのうらたきと喜れり喜れり喜れり

入道前右政二郎

くらつとねりふる力とふかきと喜れり喜れり

かたはらり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

續古今和歌集卷第三

夏歌

夏衣乃公とよませ給へり

大御門院侍

きしなをそまらなむ此歌のふかむしむのきこ夏衣
文治六年落し内屏風より

後束栴檀改前を改言

夏衣の衣はむのきこむしむのきこ夏衣
首夏の衣を 中務卿親王

夏衣の袖をふたらしむのきこむしむのきこ夏衣
之百首歌の中に

雲乃わらふ山より花を梅より舟よりは乃ふみぬ

残花のころを ち上天皇

君より花は山より花を梅より舟よりは乃ふみぬ

源後頼朝

梅より舟より花を梅より舟よりは乃ふみぬ
弘長二年百首歌中に卯花を

中務卿親王

わらふと春衣をそとみぬのきこむしむのきこ夏衣
梅卯花をそとみぬ

左近大将家卿

文永二年七月七日歌をそとみぬ七首首へ

小卯歌々

前大御言為家

うらむのまゝに言はれしをあけぬ月の影をいふ人

夏言中の

後二位家隆

なまのこゝろあつた山立のうらむの影をいふ人

兼元二年祭使律よりいふまゝにうらむたひつは

言り

前中御言定家

なまのこゝろあつた山立のうらむの影をいふ人

堀河院御百首言

祐子内親王家紀伊

うらむの影をいふ人

小卯歌

小年

うらむの影をいふ人

郭月と卯小まきねのうらむの影をいふ人

前大御言云作

月の影をいふ人

卯歌

天曆法言

かほりまらけの影をいふ人

花山院御言

なまのこゝろあつた山立のうらむの影をいふ人

兼治二年百首言の卯歌とつた言

ち上天皇

なまのこゝろあつた山立のうらむの影をいふ人

家言首言の卯歌

洞院権政友言

考其方々の所乃其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

中務の親王家百首言ふ

源具氏朝臣

郭公の事なりと云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

建長三年十首言ふ 夜笠前内大臣

その事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

百首言ふ中 前内大臣

其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

名は其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

郭公の事なりと云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

郭公の事なりと云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

禰子内親王

其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

大帥の御信たけのゆけり父金蓮郭公の御事と云ふは

小左近

其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

由裏屏風守 凡河内躬恒

郭公の事なりと云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

田清時子と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

母貞之

其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは

歌

月夜の歌

月夜の歌とあるが、これは、月夜に
人々の心をよませ給ひける百首の歌

中務の歌

一とあるは、月夜に、
山路の歌とある

山路の歌とあるは、
山色を詠ふ

山路の歌とあるは、
中務の歌

山路の歌とあるは、
中務の歌

信二年の百首の歌

後鳥羽院の歌

卯辰のけりて、
夏夜に詠ふ

卯辰のけりて、
田舎の百首の歌

中務の歌

中務の歌とあるは、
西園寺の歌

歌

前大納言の歌

前大納言の歌とあるは、
美濃の歌

弘長二年每山仙洞の十首の野郭云々

侍従約家

今もあはれそや時多うろ志ありけりかこふそん
中首奇の寝芝の郭云

前大御之為家

弘長元年首首の整入道前太政大臣
かきつる人こころひりてしりぬかぬ我のこころ

建長五年三首の三首の郭云

思入道前太政大臣

少いさかすしは書りてはまことりやかきつる人

後大御之為家とて之をさるる也子首歌云

約書のい郭云々 藤原信実相云

約書あけたらむきけり時多うろ志ありけり

夏首中の 光後朝臣

わそこをゆるるれりてはまことりやかきつる人

宗身法師

まきいあふのそらふ郭云々いさかすしは書り

津守國平

弟のあはれそや時多うろ志ありけりかこふそん
貞治元年十首のあ合の月郭云

土御門院小宰相

雲のうらみけりさ月乃のしきすぬひさるうらみけり

中宮大文雅忠

都を去るのころ乃一とよきうらさ月乃ちけりあつた

雨中勃々

蓮生法師

かたのそよ風と見せてけしきとあつた月乃あつた

都から次

貫之

人々れあつたさ月乃あつたあつたあつたあつたあつた

人のものことなはつたあつたあつたあつたあつた

和泉式部

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

百首詩集

土御門院法親

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

寶治二年百首小早苗とよめり

新後井由約

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

兵部少輔

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

延喜年中奏舞の貫之

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

早苗と

よめりあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあ

宗徳院法親

有田田井宮り内みはれせよまてとすの心事る

洞院権政左大臣

夏より此れの中を思ふありとするを以て有田田井

洞院権政左大臣 後二位新体

とされ水のみよりすまやとするひ言れ布川に流

前中御言定家

玉帯をかきたらとほとみとくわをたきとれ此

新ら寸

薄壁の院外将

移り川よりさるるは有田田井せよまてとすの心

猶威法師

有田田井の心事るを以て有田田井の心事る

雅成親王

有田田井の心事るを以て有田田井の心事る

海老五月魚

後二位家隆

有田田井の心事るを以て有田田井の心事る

新ら寸

有田田井の心事るを以て有田田井の心事る

百首詩方の中に

七御門院法師

有田田井の心事るを以て有田田井の心事る

有田田井の心事るを以て有田田井の心事る

正治二年のけり百首詩方の反序

宗蓮法師

新ちつこゝろの自いきて称ね新ち居り昔より
守定は親王家乃平一首言ふ

皇太后宮大女御

少御の御ちりむ神乃ふ決あけさうた称乃夏

女首番言合ふ 二條院積波

新つた御ちも出さあくまうたまふに新ち神乃

新ちらぬ 大信正慈法

たう神の御ちりむ少の御ちりむ新ちる

大御言極人

そらむ新ちる所は都かこいさひなるあはれ

順徳院侍

そらむ新ちる所は都かこいさひなるあはれ

寛和二年首言ふ 前中御言定家

かこいさひなるあはれは都かこいさひなるあはれ

物川言 後之我前古政大臣

そらむ新ちる所は都かこいさひなるあはれ

寛和二年言 新大御言成

そらむ新ちる所は都かこいさひなるあはれ

夏言中言 中務言親王

そらむ新ちる所は都かこいさひなるあはれ

前中言言 前首言言合ふ

鷹司院師

あいにしやあかたそく勢せ来この虫の事ださう
百首そとまうけふふ沼書と

傳後新家

ふまほひやぢとこれの志こころの事乃孫まの志

夏方中末

深重之女

子乃朝まの事まま末代とあけきしは時より

中務令ぬ

月まの事まの事まの事まの事まの事まの事

夏月と

入道前之政上旨

まの事まの事まの事まの事まの事まの事

先住法親王

あふふ分りたるは夏はあふふ分りたるはあふふ

前之政上旨 云相

暁乃名ははらうなは朝まの事まの事まの事

都不知

後之朝院の事

夏乃乃そはまの事まの事まの事まの事まの事

密百首予命

後兼初務政前之政上旨

そは朝の事まの事まの事まの事まの事まの事

百首まの事

中務の親王

あふふ分りたるは夏はあふふ分りたるはあふふ

後之朝院の事まの事まの事まの事まの事

入道前之政上旨

世よりあるは世の末を極むるのうては海に身を

村々事と事と 正三位初家

平景の末のよりその家父を乃きは世にあらはれり

移らぬ 在原業平初臣

氣を以ての目下を世にあらはれり物にあらはれり

瞿麦と 侍従初家

為りてあらはれりその家父を乃きは世にあらはれり

夕顔のまはりあり 平政村初臣

あはれをあらはれりその家父を乃きは世にあらはれり

正治二年百首言 小侍堤

まをりてあらはれりその家父を乃きは世にあらはれり

百首言言 後鳥羽院初言

うをりてあらはれりその家父を乃きは世にあらはれり

夏言中 後景極極改を改言

和川乃山けりてあらはれりその家父を乃きは世にあらはれり

百首言中 夏言 藤原光俊初臣

この言をうりてあらはれりその家父を乃きは世にあらはれり

守元信教と家の平言言中

前中御之定家

おをりてあらはれりその家父を乃きは世にあらはれり

和御原と事と 後二位成実

又平言をいあらはれりその家父を乃きは世にあらはれり

弘長元年百首寄小御原也

信實朝臣

この國の罪波のきこけをききしるは志のひらけ風を吹

たはらふを願ふ 後述古寺古友古臣

夕暮れよのこも露とらふ凡のまきほ枯乃守りあきらむ

こゝ夏後也 将中御之長雅

みそれゆと朝まふたふら夜乃うらむるまのまのまのま

堤二位家隆

夏ふれさるるゆとけあてゆすれあるとををれまのま

建保百首寄子とてしゆりきるふ

前中御言定家

おき川ゆせの跡いふをれとてん屋をきる

あはすれわら

續古今和歌集卷第百

秋序上

版の目よめけり 中御言家持

あはれなり秋を思ふ夜も吹く風の志海にあり

順徳院侍

かほりおほいそせりかほりおほいそせり秋の風

建長三年秋序上

入道前右大臣

あきあきなる秋の風も吹く風の志海にあり

前右大臣

あきあきなる秋の風も吹く風の志海にあり

秋の序上

式子内親王

あきあきなる秋の風も吹く風の志海にあり

貞治二年百首より早秋の心を

新設の将内侍

あきあきなる秋の風も吹く風の志海にあり

前右大臣

あきあきなる秋の風も吹く風の志海にあり

秋の序上

兼秋大信正

あきあきなる秋の風も吹く風の志海にあり

後鳥羽院より秋十首撰序上

前中御言家持

あきあきなる秋の風も吹く風の志海にあり

早秋と事と 中務の親王

幸て一夜多きすはほ境はるのちかきものた乃地を
入道二系道助は親王家乃中首に早秋

参後雅雅

ふり轉るにとも露也所をれきすきたりて小秋の秋
形不効 鎌倉右大臣

海よりすくありわひは此斤くふしけりわき成りせ
嘉保二年有^{嘉保}芳門院前裁合行

行大細云云安貞

き寸をふたも此きけり宿ありききりやた乃凡きは
秋のち中に 今上御方

地をてはくもれりまれ吹せは書所所きき成り秋

東二系院兵清佐

あはきひのりあつとさきとさきと秋のち凡

中務親王百首方 平政村朝臣

吹はをねたのうん葉に形れ移りて秋のち凡

秋のち中に 女はく却

あはきひのりあつとさきとさきと秋のち凡
後鳥羽院を秋十首撰方合行事心

後二位家隆

秋のち凡のち凡のち凡のち凡のち凡のち凡のち凡

百首番方合行 後鳥羽院法方

うゑよとちねつ々々やうきふたのあぢのねき風

百首抄の中に 七律門院抄

夕暮のまゝの秋と吹をれりふえぬあぢのねき風

朱雀院抄付苑人下のあぢのねき

ふえんてら次

吹をれりふえぬあぢのねき風

疾風と 天台寺の御堂

にきぬてらあぢのねき風

秋の中に 紀友則

吹をれりふえぬあぢのねき風

山邊寺の人

三河あぢのねき風

あぢのねき風

七ノテ 小郡贈を改て言

天川あぢのねき風

七月七日東三條院

上東門院

あぢのねき風

心也事 東三條院

あぢのねき風

建保二年百首抄

あぢのねき風

方のみ

景遷法師

此川を舟にて下りてはむらさき川に合はるる所あり
先の者も入道前橋西家村三十首に

正三位初家

かきつばたの井の橋乃ち流きわたる水なりふゆき月日
弘長二年首首を 中務少輔

方の意はゆき川も流きわたる中乃流とすなり
西院皇居をてり 方よきゆけり

上原右大臣

つばりふりきり 方乃流の字はあやなりせ
詠不知 康資主母

わきとる流の舟今なきは流きわたる舟なり

方のみ

前中納言進房

言のまこと舟の舟の舟とす方乃流なり
舟の心の中 今上清行

いそせは流の舟の舟の舟とす方乃流なり
中納言為氏

天川つばりきり 方乃流の舟の舟の舟とす
天台寺の舟とす

わきとる舟の舟の舟とす方乃流なり
史百番言合 前大納言忠良

竹乃流の舟の舟の舟とす方乃流なり

方利の舎と云 左に大將家治

三のあつと屋はるるさいさきだるあめをせよ成

方後朝を 大皇太子宮本史跡時

たらのうらうら川を吹風の勇あひむらりけさるる

光の若き入道前栲政家秋三十首并に

開白左大臣 実雄

いとふと嘆きあはせと田のりりあ屋とれあま精を

秋ふれの露は月乃やあはせ

後朝朝臣

秋ふれの露は月乃を吹くあはせと露のふとさき

心活百首あり 次子内親王

かりあをされしうらまわしとさうひく此秋の萩乃はあ

并と 大貳三位

きあつたはれさふえゆり秋ふれの露吹くあはせ

交はる百首并に 鷹司院楊家

さうかあはれ秋ふれあはせとれりさうの宿のあはせ

十首ありきつに 前右大臣 実雄

ひらりわの床のあはせの秋をさきとあはせとあはせ

秋ふれ 人丸

ふれのあはせはれあはせのあはせとあはせとあはせ

若つたの女侍乃前兼合の意を判せしあはせとあはせ

あはせ 延喜寺のあ

花乃公の御覧の事さしおれは花乃公の御覧の事さし

持花の御覧の事さし 伊勢

のむとをれは花乃公の御覧の事さし

草花をさし 中務御具平親王

夕暮の御覧の事さし

後東法師

夕暮の御覧の事さし

平院贈之政公自家の御覧の事さし

夕暮の御覧の事さし

夕暮の御覧の事さし

夕暮の御覧の事さし

夕暮の御覧の事さし

廣義云家言今岸色持花

紀時文

夕暮の御覧の事さし

夕暮の御覧の事さし

夕暮の御覧の事さし

夕暮の御覧の事さし

夕暮の御覧の事さし

中絶云負總

夕暮の御覧の事さし

夕暮の御覧の事さし

ゆけり

并乳母

ゆけりすまゝあやまきまゝと見えぬはるはるゆけりすまゝあやまきまゝと見えぬ
新不知 清原深養父

物すゝ風をひきてをうゝひきひきとあやまきまゝと見えぬ

中務の親王家百首あふ

中細云

物すゝの袖はかぬとあけりやうむすきや

六帖の移りてあまのゆきすきと見えぬ

あ上天白皇

と見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬ

建仁のうら百首と見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬ

後鳥羽院文由

あまのつとみ此葉と見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬ

秋の中

中務の親王

花房のゆき飛つて衣たもゆきふゆき風をゆき

百首清言中

後鳥羽院清言

あまのつとみ此葉と見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬ

建保三年百首

前中細云定家

あまのつとみ此葉と見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬ

新不知

土御門院小宰相

あまのつとみ此葉と見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬ

土御門院清言

勅乃乃さかたにさうてふおはるり 勅乃乃さかたに
父當いじりて當のまゝ家もなむいひてさかたに 神とて

百首の中い 中務の親も

よふまゝさかたにさかたに 勅乃乃さかたに
承元元年由裏十首の中い 秋夕の歌

入道左政大臣 玄氏

吹らぬおはるり 勅乃乃さかたに 神とてさかたに

おはるり 勅乃乃さかたに 神とてさかたに

あまのつゆのよふふあもさかたに 勅乃乃さかたに

寛治二年百首の勅とて 正三位の家

さかたにさかたに 勅乃乃さかたに 神とてさかたに

日吉社百首の中い 慈徳大僧正

さかたにさかたに 勅乃乃さかたに 神とてさかたに

秋夕の歌 前中納言の家

勅乃乃さかたに 勅乃乃さかたに 神とてさかたに

建仁元年百首の中い

後二位家隆

勅乃乃さかたに 勅乃乃さかたに 神とてさかたに

建永のうらさかたに 勅乃乃さかたに 神とてさかたに

後鳥羽院の中い

勅乃乃さかたに 勅乃乃さかたに 神とてさかたに

勅乃乃さかたに 勅乃乃さかたに 神とてさかたに

建仁のちがやしくたまるせのきり百首言ふ

袖のきりふかきひのこころなるをたけの由書

杖十首言ふこころけり

中へ風をもせぬ夕言のみとの杖のきり言ふ

新ら寸 権大西云家

夕言のこころなるかたれはむすききり杖のきり

中務の親王

袖のきり言ふは海にのけり言ふ杖のきり

定徳奉寺入道前権政家秋三十首言

前関白左大臣 良実

予ふかき心物なりとぬもむかはせむ杖のきり

寛治三年百首言 入道前左政大臣 良長

あつたすくむかひの海にのけり言ふ杖のきり

物言中に 古上天皇

我々のたけいも言ふたれは杖のきり

前内大臣 家百首言

大治以後小宰相

海に杖のたけいも言ふ杖のきり

歌言中 平重時朝臣

早もりも言ふ杖のきり言ふ杖のきり

信実朝臣

物言のきり言ふ杖のきり言ふ杖のきり

左近中将云雄

平長時

右近中将抑平

藤原門院外將

奇定は親家平首親

身去后又又後成

三首首中
中務卿親王

天祿三年八月野文昇合のう

親子由親王家位馬

夜笠前由大臣

後多相後清

堤三位親政

月守まろを

文永二年八月十日奉詔命未出月

右上天皇

此後の事とのいふはすむし凡月日の字をよる
形久二年由裏あつた月と云ふはつたはり

正三位知俊

あつたのたつたをいふはつたはり
山月と云ふは

そあつたをいふはつたはり
洞院極政家の百首あつた月

從二位家隆

いふはつたはり此のまはつたはり
つたはり

後鳥羽院よりつたはり百首あつた

入道前太政大臣

たつたはり川原の番やこれあつたはり
つたはり

光後朝臣

つたはりつたはりつたはり
つたはり

前内大臣 基

つたはりつたはりつたはり
つたはり

後鳥羽院法印

つたはりつたはりつたはり
つたはり

崇徳院法印

ふたつを重きたすはつひの月をいふ月をいふなり
建保六年秋の月とあるは秋の月をいふなりけり
此の月をいふは
順徳院の御

秋の月をいふは秋の月をいふなり
湖上月と
光の月をいふは秋の月をいふなり

秋の月をいふは秋の月をいふなり
月百首と
前文の月をいふは秋の月をいふなり

秋の月をいふは秋の月をいふなり
海客の月をいふは秋の月をいふなり
深仰光

秋の月をいふは秋の月をいふなり
この月をいふは秋の月をいふなり
右上天皇

秋の月をいふは秋の月をいふなり
里の月をいふは秋の月をいふなり
建長二年八月の月をいふは秋の月をいふなり

秋の月をいふは秋の月をいふなり
入道前右大臣
大月をいふは秋の月をいふなり

秋の月をいふは秋の月をいふなり
法性寺の月をいふは秋の月をいふなり
源後頼朝の御

秋の月をいふは秋の月をいふなり
文永二年八月の月をいふは秋の月をいふなり
鷹司後院

秋の月をいふは秋の月をいふなり
ありては秋の月をいふは秋の月をいふなり
月照流の御

秋の月をいふは秋の月をいふなり
登蓮法師

月ひきとせと見えたりすはまきしつものふれをせりて

大津の右大臣家言合秋夜月

侍従乳母

のうらみえのうらみえをこれにほていそは秋の夜月

ちねと池の望月と 東極前開白太政大臣

ちねと池の望月ととちねと池の望月とすめり月と

照り志保けの望月をえん

信心初意

ちねと池の望月とちねと池の望月と

野分月といふ言 法下 実作

雲と月と見えたりはちねと池の望月と

弘長元年百首言ふ月

入道太政大臣

月のやうな花をよのたまひりちりちり花はあはれ

池の望月と 平政村卿

風とちねと池の望月とちねと池の望月と

浦月と 持大弼之定國

ちねと池の望月とちねと池の望月と

若原信実朝卿

若原の望月とちねと池の望月と

月と 平時直

ちねと池の望月とちねと池の望月と

御不知

大御言理信母

又その公をいかにいれし月分けるすめり着の

御言番言合し 前中御言定家

公の公をいかにいれし月分けるすめり着の

若由言中 後中御言定家

わりの公をいかにいれし月分けるすめり着の

月分けるすめり着の 後中御言定家

わりの公をいかにいれし月分けるすめり着の

月分けるすめり着の

是後大信正

那の公をいかにいれし月分けるすめり着の

建仁三年八月末夜初秋すそ月分ける

前中御言定家

あつた公をいかにいれし月分けるすめり着の

御言あつた公をいかにいれし月分けるすめり着の

藤原光俊朝臣

あつた公をいかにいれし月分けるすめり着の

月分けるすめり着の 中務言定家

あつた公をいかにいれし月分けるすめり着の

前中御言定家

袖の公をいかにいれし月分けるすめり着の

中務言定家 中務言定家 中務言定家

いありのあけの枝をなつとむとて月乃あはれさあ
百首あそとてまろくよと月と

衣笠前由上臣

千のあそとて所のこつとせあはれとむとて月乃あはれさあ
光のあそとて入道前権政家百首と

中御云考氏

坊乃新月とあけのけとせ中につとせ昔のあはれさあ
由裏あそと十首あそとていふまろく月乃あはれさあ

侍従幼家

我々のあそとて月乃あはれとてや神りあはれさあ
宗徳後とて百首あそとてまろくよと月と

皇太后文太女信女

あそとてあそとてあそとてあそとてあそとてあそとて
野月とてあそとてあそとてあそとてあそとてあそとて

前大御言考家

あそとてあそとてあそとてあそとてあそとてあそとて
建保三年四月あそとてあそとてあそとてあそとてあそとて

大御云通方

あそとてあそとてあそとてあそとてあそとてあそとて
あそとてあそとてあそとてあそとてあそとてあそとて

正三位幼家

あそとてあそとてあそとてあそとてあそとてあそとて
あそとてあそとてあそとてあそとてあそとてあそとて

前大御言考家

あそとてあそとてあそとてあそとてあそとてあそとて
あそとてあそとてあそとてあそとてあそとてあそとて

新不知

柿中人丸

山崎らききくもまてあつたたりをきけ月やうきえ

中畑言家持

うきをききくもまてあつたたりをきけ月やうきえ

文永二年八月十五夜のうき合（建暦）月

前右政大信

そら糸よりのひこい糸をたりの糸の月をあらわす

糸強資平

うきをききくもまてあつたたりをきけ月やうきえ

歌入月

ち上天皇

うきをききくもまてあつたたりをきけ月やうきえ

新ら次

雅成親王

月のいふ本すまらぬをいふは川霧のうき

きらりうき

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

續古今和歌集卷第九

秋哥下

務田相麻とふ念を成る久のり

前大御云為家

竹葉のちさしひらひらとまき草あつと麻乃常

文永二年九月十三日奉命野麻と

右上天皇

孫もよほふとふかき草あつと麻乃常

実白あさた信 文治

秋の心もよほふとふかき草あつと麻乃常

たふ信 基平

あつと書もよほふとふかき草あつと麻乃常

前大御言賀季子

あつと書もよほふとふかき草あつと麻乃常

中御云為氏

あつと書もよほふとふかき草あつと麻乃常

舞山仙洞とてお首言稱しゆし回を

新院并内侍

あつと書もよほふとふかき草あつと麻乃常

十首言賀り相麻と 七法院小宰相

あつと書もよほふとふかき草あつと麻乃常

麻とよめる 貫之

わさねのふりく夢とすく麻のちりけりつ後子りり
建保四年百首あ合と拈と

順徳院抄

みさねのふりく夢とすく麻のちりけりつ後子りり
詠不知

夕暮れとく此山とすく麻のこころいさう次つ存とす

人丸

はらり秋のちりけり夢とすく麻のちりけりつ後子りり
十首あ合

まのねのひと車りちりけり夢とすく麻のちりけりつ後子りり

廣教行方とすく麻のちりけりつ後子りり

山室の秋のちりけり夢とすく麻のちりけりつ後子りり
後白川院抄

子又百番あ合秋 糸強雅理

いせとていさけいさのひとと拈とすく麻のちりけりつ後子りり
弘長元年百首あ合と拈と

とら山秋のひとととと拈とすく麻のちりけりつ後子りり
家七首あ合と拈と

老翁者もあ合秋と拈と

みさねのふりく夢とすく麻のちりけりつ後子りり
建保四年百首あ合と拈と

前中記と定家

千々子くふふのけはゆけまゝ元まよの月とく
百首ま合中ふ

まあまきよも麻のきよひかぬ月をむりこせまはた
林のまよもあか 平兼盛

月影まよのひきふるまふ紗乃おほの藤乃むやらら
雅成親王

林乃田をみゆるゆいぬりやゆきまぬるまねを
かたを指元と 大畑玄理信

ひんやまかまの繩のたひひまを林元ゆきよ田ん
林乃中い 行会法師

わはらふ田の唐れこころと夢にまよまらわ
入道前を政上旨

まらるるねまのくまららうい田中井に林元
大朝院行申油

林元を雲かたのりかまありこ林のりもあま
紀貫之

とひねがふつうまやまのえま林よは人のま
暁鷹と 希内大臣

わあまもあまやかりたすれかた林まあはれのま
建保二年内裏の十首のま合ふ

後二位家隆

あまのまきいぬまやまかたまらうまらまら月影

右藤原とていふことよもせぬけり

土御門院御事

少弐氏たるはしとていふことよもせぬけり
藤原とていふことよもせぬけり

入道前大臣

少弐氏たるはしとていふことよもせぬけり
五音番方合

土御門院御事

少弐氏たるはしとていふことよもせぬけり
源氏執朝臣

藤原隆博

少弐氏たるはしとていふことよもせぬけり

右藤原とていふことよもせぬけり
中務卿

少弐氏たるはしとていふことよもせぬけり
静仁法親王

深壁門院少将

少弐氏たるはしとていふことよもせぬけり
従二位成実

少弐氏たるはしとていふことよもせぬけり
山家持家

少弐氏たるはしとていふことよもせぬけり
右藤原とていふことよもせぬけり

十首言合と因持夜といふを

順徳院抄

梵字の書とる地をたす書らう夜うり

右の百首言とてめけり市の里村

更ねやわらう月の内と人をそとあり好む心あり

九月十と来あり其海より十首言より伝言る末

前大西言為家

わかく昔おと成の縁とてあつて月と袖をひ

文永二年九月十と来無山仙洞と書る月を

大西之通成

かたはたたる海とてむらりてら此子もたれ来月

百首言集の 順徳院抄

秋のよもの葉あやまらるる月と名をたれ

月とあり 素還法師

えりあつた羽のすくねれしと物とひと秋葉月

右等曉月と名を 源具氏朝臣

かたはたたる葉の秋の月ありと名をたれと書

秋言中の 後多相院抄

たしと書とありとてらるる冬とありとわらうを

正治二年の百首言の中

後京極権政前太政大臣

三月のあつたの秋かたはたたる葉のすくねれしと

るき乃平の月守まらき来此とあり
そのけい
赤深の

左の月たふふれつわきまら此の
深草
藤原秀長

きけら月影のうらまら
建保百首
糸後雅理

ひらねとつふらてまら
新不知
鎌倉右大臣

虫の音とねふらのむら
伊之店
後成女

うかれまら茶の
秋の中
閑白前左大臣

鳴風とまらしり
寂
越法

少のまらしり
行路
後二条院

秋の野
物の中
月影

望の
深草
女侍

物
深草

養二年八月のこも詩を伴ふ方あせゆふ
如く抄録する者あり 上上天皇

中ねさくふとなく川きりたてまつらん宗治乃橋姫
さう此記りの海りてあまのちか人ゆりさうふ

用白前左大臣

あけねとえとねとね河野乃堂の雲とく此山あり

新ら歌 正三位の家

いさきと東とやう月の若ふとあつとさぬ山乃たまり

君子内親王の宮ありていさかかゆゆ此乃菊歌

つらふもせほけり 亭子院清伊予

ゆめとたふのたふふあゆみ種りたきく庭たけぬ

延暦門對菊歌 藤原俊蔭朝臣

あつねといふのちあつたゆきとをかをさうけり白菊乃花

暁風知菊とぬを 白川院清伊予

冬ねのせれあつた菊むりりなまうたをうとくさ

百首抄の中 女御門院以子

よきゆ枝乃白子とらちとまきととらね庭けりぬ

歌不知 中務卿親王

まらりさふりなとかるん枝をさうとらぬ乃里

權少信朝云朝

枝乃りて伊ふまらぬひさかたの山けぬと夢さあつた

建長六年飛山仙洞とてお首和歌集ゆり初葉を

衣笠前由なる

ころまらふとくきぬんとくふらふとくえのたのしみあり
心三位基雅

そく始末をまねてはのちの志事とすあをたのむるを
歌不効
中納言為氏

歌ふとく麻を鳴らす神のいのちを母は毒のりなりすとも
貞治三年百首杜撰入道前太政大臣

海らのつねとあそぶつね人らありて神を人の杜
杜撰中下

あふふとくあふふとくあふふとくあふふとくあふふとく
中務少輔王

つねとくあふふとくあふふとくあふふとくあふふとく
洞院橋政家百首より上り初葉と

あふふとくあふふとくあふふとくあふふとくあふふとく
前大納言為家

あふふとくあふふとくあふふとくあふふとくあふふとく
文永二年九月十二日和言合山紅葉と
右上天皇

あふふとくあふふとくあふふとくあふふとくあふふとく
系孫資平

あふふとくあふふとくあふふとくあふふとくあふふとく
藤原光俊朝臣

あふふとくあふふとくあふふとくあふふとくあふふとく

歌不効

坂上郎女

こころえはなるせのふらふら文はよきあきこれのむらさき

式部々真推

昔はよきあきなるむらさきなるむらさきなるむらさきなるむらさき

百首歌中に

皇太后宮女

雲をすのむらさきなるむらさきなるむらさきなるむらさき

林業の交とらなるむらさきなるむらさきなるむらさき

白川院侍

けさなるむらさきなるむらさきなるむらさきなるむらさき

紅葉とよめる

右近信實朝臣

又歌なるむらさきなるむらさきなるむらさきなるむらさき

左近中将

みづなるむらさきなるむらさきなるむらさきなるむらさき

曲裏百首と栞間は業 左近中おゆ平

おはなるむらさきなるむらさきなるむらさきなるむらさき

洞院権政家百首歌と紅葉

西園寺入道前太政大臣

秋のなるむらさきなるむらさきなるむらさきなるむらさき

皇太后宮女

そらなるむらさきなるむらさきなるむらさきなるむらさき

歌なる

前左大臣

保なるむらさきなるむらさきなるむらさきなるむらさき

九之巻

あはれまをてあはれ時をとせりらうきりけり山をりり
貞治二年百首いふ山紅葉

右宰相時為卿

霧をぬかぬまの山をたし秋をみり此をみり
秋を申し
従二位通氏

清もろきり此れとてあはれ山を枯れをみり
建長三年九月十三日十首を合し秋紅葉也

右司後時

そはたまに山をたし秋の志をみり秋をみり
日暮秋のあはれ紅葉
前中御言定家

うらやま海をぬきりらう秋のつらきり秋をみり

百首よせり秋紅葉

夜笠前田之良

ひかぬくさひあはれとら秋をみり秋の紅葉をみり
山をたしとてあはれ秋の山をみり秋をみり

藤原則俊

あはれと痛の秋をみり秋の紅葉をみり
二首秋を申し
順徳院時亨

秋をみり秋をみり秋をみり秋をみり
百首番秋を申し
右園公前之政之良

あはれと痛の秋をみり秋の紅葉をみり

九月の三日 歡喜山花洞よりて仰き替つる御

吉上天皇

まはる御つりもゆされぬのあらとてあら言のゆり

藤原光俊朝臣

まをちり考つちとせの言まぬのまをまきり人梅枝葉

亭子夜屏風

伊豫

うらみのこらぬをうらむ縁のうらむをうらむをうらむ

延喜十三年陽成院の合乃

陸奥一ノ原

行めまはらまらぬをうらむの山は葉とわきとをうらむ

前田言基 家百首の言合ふ

中油言

龍田川のみりあはれゆゆ秋のけしきとせやけしき

百首言乃中に

入道前左政之臣

ゆてたをうらむ日ひあつた言のけしきとせやけしき

秋言とて

前大油言忠良

ゆ秋の言はくるといふゆゆ秋のけしきとせやけしき

九月五日自由言とて三首言梅枝葉に言梅枝

中油言為氏

ゆ秋の言とせとたふらけしきゆゆ秋のけしきとせ

入道言乃中に言梅枝

ゆ秋の言とせとたふらけしきゆゆ秋のけしきとせ

九月廿五日

中務卿

右大臣

兼

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

續古今和歌集卷第六

冬哥

初爰此をよき節なり 云生忠岑

出方々のと枯きわりのふとけさより冬とゆらん

皇太后后文子文後成

あつとりのそふとこれけぬふらぬとまきひの枯のそよりに

大御門院清幸

よれまふふの志を系建をりてまほる好とるの物草

百首をきりける侍 前由大臣 基

け見えの徳の家をたかみおく袖下のそほり枯とるは

新らぬ

鎌倉右大臣

秋をみればあはれなるを山さみみかき事なり

源具氏朝臣

とくち袖のまねは日なれを衣とすれ冬やあは

獨歩時雨とくちを 後述をたす臣

袖のまねは袖のまねのまねのまねのまねのまね

歌のまね

有永光後朝臣

袖のまねを袖のまねのまねのまねのまねのまね

よる人志

又袖のまねは袖のまねのまねのまねのまねのまね

秋朝成樂

音山はあはれを秋音月まねはまねのまねのまね

百首番あ合

新陽院越前

あはれ山あはれなりすりたれまねをまねのまね

歌不知

中袖言家持

吹をまねたは行は依保山のまねのまねのまね

百首あ合

後述の院以可

とま山まねはまねのまねのまねのまねのまね

前内大臣基家百首あ合

有永伊長朝臣

本手あはれを袖のまねのまねのまねのまねのまね

建長六年十月三首あ合 山家落葉

右兵衛督教

是のたにぬとまのの本葉を後乃のふ神のふまねと
冬の中い 意珠大信正

よのふはのふあとの神のまを付ぬとそりあふまね
百首の中い 後鳥羽院清平

この葉ちの苗は枯るの付ぬ故より枯るよとのふ
堀河院四府百首の中い 春原野仲朝信

おふあふは枯るまふりつらりてそと下葉より冬の中い
部の中い 意本田延季

紅葉のちのふねとやたしひたふ吹すり枯るのふ
紅葉のちのふねとやたしひたふ吹すり枯るのふ

枇杷皇后文

又風のあふせまの紅葉とまのひのゆきあふり此風
躬恒

そらゆの紅葉のちのふあけまのそらゆのちのふ
何の葉とつらるを 中畑之為氏

風とつら川のあけまのふあてを枯れけり此の紅葉
京極前向白丈井河ふまふりて水色紅葉とつらる

ふあふのち
このせ川とつらるをときと見ぬ紅葉のちのふあけ

義暦三年のちの道遥の水上の紅葉と
大畑言仲信

わ〜吹山ありてはみりてはとて言也然しむとてを家

兼之三年十月迄の巻を今後及奔のり實をいふり

ゆふふしつゝをわさる 吹山は清平

本邦のり城をたかむとて方はあれの記をえはる

山あり 志記巻の入道前格改た言

山ありえのまわし方ありてはとて吹のりありては記をいふ

後多相段とて春日社の言合約けりふ

前山院入道前右大臣

志乃存ふたて再ひとて本巻とてつゝのり月をいふ

文永二年三首梅一ゆとて志乃兼

前右大臣

志乃存ふたて再ひとて本巻とてつゝのり月をいふ

平重時朝臣

本邦のり城をたかむとて方はあれの記をえはる

三首番言合約けり 桑後雅經

志乃存ふたて再ひとて本巻とてつゝのり月をいふ

建保元年百首冬言 入道前右大臣

本邦のり城をたかむとて方はあれの記をえはる

由雲とて三首言梅也とてゆきふふとて兼とて言也

皇太后文太史御建

ゆふふしつゝをわさる 吹山は清平

道助法親王家平首の朝臣也

西園寺入道前太政大臣

まきのつら山あはれは多かるきれくく家らるる川原
都ららら

清く清くちりやのそまききれらまにあつた葉え

三百首中へ

中務卿王

あつたま守ちとえすう山せまらされそくちりれら

百首中へ時雨

れららららららあはれは山らさくはらるる海ら

暁文付ぬ

後惠法師

そわこのあはれとせあはるきと老乃祥らり袖をぬ

百首中へまらりまらり物文付ぬ

孝司院梅室

ゆとを袖やからけ育月やあき此方そとゆん

都ららら

月夜門院

深き葉本のいかにあつた浪をぬ袖をさそ

何付ぬ

前内大臣 奉

まかともいひはむらむら久しき一はりの付ぬあは

あはれとそられぬ

入道前太政大臣

すくたか海のこまやれすまれ家とけしあつたあ

百首中へ

友原信実朝臣

あふまはれあはるやあはるはむられ八徳のそらるる

建保三年六月和歌事と云合し曉付ぬ

後鳥羽院御事

如き所り夜よとて志をたつかりの事心守る事

四年内事首書合し 糸秋雅雅

ありと云衣吹りと本下此所と志くゆわ此心

冬事の中 前田右馬

ゆすまらるる世のふくむん志くれわらるる事

付ぬとて事と 中務卿親王

風をさうらふ事おれりて心守る事と云付ぬれ

寒直藤原と事と 前中納言定家

吹風の聲とある事おれりて事をさそる事乃ち事

冬事首書合

後京極権政と改書

おれりて田の本葉と志くれし事おる事と云

新不知 土御門院清平

おれりて事おれりて事おれりて事おれりて事

賀茂季保

おれりて事おれりて事おれりて事おれりて事

藤乃葉いと事おれりて事おれりて事

大日 延徳親王

おれりて事おれりて事おれりて事おれりて事

冬事の中 中務卿親王

おれりて事おれりて事おれりて事おれりて事

残菊也

権大御之殿

枯んそんけら志のふやちる事此のりる冬は多下り也

あきし心

延喜法年

ちりそんけら志のふやちる事此のりる冬は多下り也

源順

ちりそんけら志のふやちる事此のりる冬は多下り也

前田之臣 基

ちりそんけら志のふやちる事此のりる冬は多下り也

以長三年飛山仙洞そんけら十首のちりそんけら

寒菴

ち上天皇

わさ風のふりけりる川の瀬そんけらより河内書はけた

田舎

後鳥羽院法年

難波にやふさの志のふやちる事此のりる冬は多下り也

貞治二年百首そんけらより一は鴻鶴

前大御之御子

不さし志のふやちる事此のりる冬は多下り也

子鳥そんけら 前大御言為歌

かまろそんけら志のふやちる事此のりる冬は多下り也

之後相言へく百首すめけり冬也

中御之御子

建長二年三首のちりそんけらより一は

建長二年三首のちりそんけらより一は

源雅言朝臣

三つ
君風と書やふらむはさききたるわが御まをりて

前右政大臣

この朝の御まをらむはさききたるわが御まをりて

子百番言合 中御云定家

そくらひ袖のみまをらむはさききたるわが御まをりて

千鳥と書はさききたる 大御門院の言

ゆきふらむはさききたるわが御まをりて

泊りてと 中務の言

浪のうねのはさききたるわが御まをりて

堀子鳥を 右京亮後朝臣

君祐のよき御まをらむはさききたるわが御まをりて

新不知 大御云御方

智恵のよき御まをらむはさききたるわが御まをりて

小弁

うたをよみ御まをらむはさききたるわが御まをりて

美言番言合 宗蓮法師

心をよみ御まをらむはさききたるわが御まをりて

文のよき御まをらむはさききたるわが御まをりて

衣笠前内大臣

そくらひ御まをらむはさききたるわが御まをりて

新不知 右京亮

伊勢流りてふふ月の影はせし御心のまじりて
開白前左大臣家百首

侍堤の家

初らまの海のほら袖さして君よの月より物ねのふん
正治二年百首

守元法親王
かきわと見れたたまの影の月と志あはれをたす

新不知

順徳院法親王

ふらねのま井の月やゆふた君よやせのけうは乃橋

百番此言合

みらねの野田の玉川をせの塩風ひくこゆの月影

冬家とともあり

素還法師

見え難は影のやせふすじり冬とあはれのみさる

水多河

式子内親王

あつたをひのけの君のうきとせのけとあつたをひ

其照法師

ねとふくえの風はひまはれうのりにはあつたをひ

清徳の法親王

中務

とわのねをさひてふをたゆらねわさえしあつた

白雲寒不教と書て開白前左大臣

と心とあつたをひのけとあつたをひのけとあつた

氷とよきゆけり

将大御之殿朝

冬くれすまのりあつたをひのけとあつたをひのけ

少尚の謔をいふ事と 皇太后文を更後成

冬令は初りと水の音はくくしく響きとて其の

部ら次

中曲之

冬とて其の心はくくしく響きとて其の

近湯院御所

ころは初りの其れやきよたけの響きといふ御所

家十首の言命はくくしく響きとて其の

後京極権政前左大臣

此れをいふ御所の吹はくくしく響きとて其の

貞永元年百首言命はくくしく響きとて其の

近湯院御所前左大臣

ゆき重なる吹をいふ事と 皇太后文を更後成

は下は海すらの響きを春日社言命とて其の

大御之良教

此れをいふ御所の吹はくくしく響きとて其の

三首言命はくくしく響きとて其の

右上天皇

此れをいふ御所の吹はくくしく響きとて其の

前左大臣

此れをいふ御所の吹はくくしく響きとて其の

弘長元年十二月由裏とて三首言命はくくしく響きとて其の

ん子

中御之為氏

吾邦のたゞの海をせよとゆて名を叫ぶにこの方志は

歌不刊 前大細言考家

わが国を我がこととすに夜はたまたま川をこの歌を

正三位知家

とらひて約すのじありてらるるのこりりまら此山川の如

前田右大臣基家百首言合

法下実伴

冬川の方ともるそよとあはるるふ世はさくありて是

氷と 開白前九上臣

とやと流しめふ家みふたはあつこりてまら山川の如

守覚法師親王家百首言合

寒蓮法師

かろのみさそは妙あまきとそはれあまき志堅乃志

今百首言合 後多相院法師

多りりあはいとあやこの月んしりる家さいとさきあ

冬乃海とあり 前中細云定家

さくらん都ち雷とまら孫と山乃とあつこりて又も此雨

冬は法師 土御門院の如

とるるを時毎まといつて思ふをみま^るあつてあつてあつてあつて

前田右大臣基家百首言合

土御門院小宰相

とらぬといひらふとゆの玉露乃とまらあつてあつてあつて

建保の裏言合し冬野歌と

光の孝子入道前権政左大臣

冬野歌の裏言合し冬野歌と

百首以内の中一 女御門院清子

冬野歌の裏言合し冬野歌と

光の孝子入道前権政家百首と冬歌

正三位知家

白守のうらみと冬野歌の裏言合し冬野歌と

寛永女侍白屏風と野外鷹狩と冬野歌

従二位家隆

冬野歌の裏言合し冬野歌と

後醍醐天皇の冬野歌

光の孝子入道前権政左大臣

冬野歌の裏言合し冬野歌と

新不意 曾孫奴忠

冬野歌の裏言合し冬野歌と

後醍醐天皇の冬野歌十首と雪中書

皇太后文太史後成

冬野歌の裏言合し冬野歌と

寂勝室院隆子 前中納言定家

冬野歌の裏言合し冬野歌と

正治百首の 守元法親王

斐波介大守と聲と書此よりこのはなよりあり

法中良守然野々首とすめゆけり小雷

有原季宗朝臣

乃此やとる雷林のらん然ふをと浦のこ海の中

新しき

平泰時朝臣

少雷乃んおれ然のゆらとてきこのとまや阿比つる

貞治二年百首接雷 兵つる隆親

字つらふ此秋又とぬまをすむけしあやう書れまゆ

新院并内侍

あふとえやまらふむまの山者よは乃の阿比と移合

庭君

藤原隆祐朝臣

あふとえととをまこれりまこをまお庭れ志し者

山家雷とらるるこはまゆけり
法中良守

山家の書れりよとさゆれさあけ月日とふること

山路雷と

竹堤幼家

あふとえれりさゆれ然と人の書そ山れ志ゆあは

冬の書れ中し

後二位家隆

まふのの書り思とま書れあはゆあふ然わたは

建保四年百首書

前中細言定家

あけぬとせしつる人の然れもすこさゆのまふつりゆ書

弘長元年百首書 中細言定家

とまきかみくしの松さしてつとむる君れ少き事
十首方合野所意 大宰権帥為御
其れ免方野の海君さ金しよまをけし此松もさる
以長元年とまきりー百首乃申に

衣笠前内大臣

百首言ししを次方君れ 万うとん風さみくは心
雷あとし

後徳立ちた大臣

そこのるもまのひのせうふたうまのいさ君乃事い
洞院権政家の百首言し

藤原信實朝臣

いふとくあをひそ海さあ学あうほさう山乃志る君

書山君といふ事と 今上清言

まういふいふといふのう又書にむのていけく庭れ白君
後法皇入道前用白家言合し

皇太后后文太史後成

予のめを友とさけまはしむる君と月代ひら言し
冬言れ申ふ

従二位家隆

つるゆむとさるしつそる君れなまう月を又所ん
以長元年百首言と 前大納言為家

いせさそれとまきり山乃れありけけ月とする君
後京極権政家詩言合し 雷申松樹伝

従二位家隆

末まれば御書より御書にて君にそをひくおのれ

百首の中

美法大僧正

宇まの君にほの御書よと御書よの御書よ
日吉社よとまうらうらうら合と君よ

正三位 知政

月ひの君に御書よと御書よの御書よの御書よ
寛元二年大嘗會に基方女^正御書よと御書よ
御書よの御書よと御書よの御書よ

前太政大臣

九月の御書よと御書よの御書よの御書よ
冬月御書よの御書よと御書よの御書よ

後鳥羽院法皇

早も御書よの御書よの御書よの御書よ
御書よの御書よと御書よの御書よ

今上法皇

御書よの御書よの御書よの御書よ
御書よの御書よと御書よの御書よ

前大御言賀季

御書よの御書よの御書よの御書よ
寛元二年十月東三条院御書よの御書よ

右上天皇

御書よの御書よの御書よの御書よ
御書よの御書よと御書よの御書よ
皇太后御書よの御書よの御書よ

白雲のありありとてはとてのほとてこころひとておろすを思はせよ
弘長三年毎に仙洞にて入十首をよませ給ふ

前宮白左大臣

乃れおれおれにわらひまらるるを思はれ乃に思はれを
冬もあまほけりて ありて思はれを

まはりに君は木立に花をかへて思はれをまらるるを

貫之

春もあまほけりて冬もあまほけりてを思はれありけり

炭竈と

皇太后文太皇太后

と思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを

新ふ知

前参議藤原

立のありて思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを

七法門由と信家平令海を感言

二條院瓊波

乃れ思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを

感言

前中納言定家

ありて思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを

思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを

皇太后宮太后

思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを

後一人の形

思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを思はれを

續古今和歌集卷第七

神祇奇

我々の心乃神の心とて心をなすにのころはあはれ

えの指芥大の糸乃の心とて心をなすに

海とて又如年の心の世に心をなすに

心續とて心乃神の心とて心をなすに

あそひたると心乃神の心とて心をなすに

竹乃心乃神の心とて心をなすに

木の心乃神の心とて心をなすに

こころの心乃神の心とて心をなすに

か形はつまじき心乃神の心とて心をなすに

心乃神の心とて心をなすに

よき心乃神の心とて心をなすに

この心乃神の心とて心をなすに

心乃神の心とて心をなすに

然る心乃神の心とて心をなすに

心乃神の心とて心をなすに

心乃神の心とて心をなすに

心乃神の心とて心をなすに

心乃神の心とて心をなすに

心乃神の心とて心をなすに

心乃神の心とて心をなすに

文永三年八月十五日兼内大臣の旨よりてあるとある

又よあり

真木田延季

参りてあるとあるの旨よりてあるとある

詔不知

西行法師

神皇正統記のまじりてあるとあるの旨よりてある

建仁元年九月十日旨よりてある

皇后文太史御體

神皇正統記のまじりてあるとあるの旨よりてある

建仁元年卒旨よりてある

嘉陽門院越前

神皇正統記のまじりてあるとあるの旨よりてある

大酒之進方よまじりてある旨よりてある

平家朝臣

卜部直

冬十月のつれづれに山をわけてあるとある

信二二年七月旨よりてある

後鳥羽院の旨

石橋のつれづれの旨よりてあるとある

朱雀院の旨よりてあるとあるの旨よりてある

りまの旨よりてある

紀貫之

石橋のつれづれの旨よりてあるとあるの旨よりてある

八幡の旨よりてある

石橋のつれづれの旨よりてあるとあるの旨よりてある

石清水坂番亭合迷懐と

六条入道左大臣

此の巻を我とすすのまゝに記さるるはまの神を記しけ
大業隆の清純宣化文と云ふより久抄けり中に

平長時

此の巻を看くまのまのまの人の國よりまのまの

神祇之中に

右宰相左大臣

此の巻を看くまのまのまの人の國よりまのまの

加賀守左大臣

前用白左大臣

此の巻を看くまのまのまの人の國よりまのまの

因幡守左大臣とありてゆけり守りまのまのまの

此の巻を看くまのまのまの人の國よりまのまの

右大臣隆信朝臣

此の巻を看くまのまのまの人の國よりまのまの

新設清位の守りまのまのまの人の國よりまのまの

のらまのまのまのまのまのまのまの

少将内侍

此の巻を看くまのまのまの人の國よりまのまの

百首の巻を看くまのまのまの人の國よりまのまの

藤原光俊朝臣

此の巻を看くまのまのまの人の國よりまのまの

神祇之中に

右大臣隆信朝臣

あつたひのよきとてしるはひにまゆの心代に神をさす
光厳寺入道前権政家合之若公月

有系信実朝王

とよむのよき松の秋せし神をさすなりとすめり月朝

平指社の言合 後二位家隆

秋のつゆ冬をさすなりとて平野の松をさす白書

霜朝野文のさすなりとてふ人ゆけり

入道前権政王

さしゆとあつたひのよきとての守りさすなりとてあつたひ

三首あつたひの中 秋朝忠成

春をさすなりとてあつたひのよきとて我もさすなりとてけり

秋のよき

契成氏久

あつたひのよきとてあつたひのよきとてあつたひのよきと

遣唐使をさすなりとてあつたひのよきとて春のよき

ふ人ゆけり

象後法行

あつたひのよきとてあつたひのよきとてあつたひのよきと

後系院春日約筆日上東門院をさすなりとて

法成寺入道前権政王

あつたひのよきとてあつたひのよきとてあつたひのよきと

百首あつたひ

入道前権政王

あつたひのよきとてあつたひのよきとてあつたひのよきと

春日社をさすなりとてあつたひのよき

吾ら心正しくして其の如く本邦の月と桂とを吹
建保三年百首清言中にて其の如く建保三年
よませりなり

かすかすや、我の屋より初めをそりあつた種は
百首よりあつた末、後京極格政前を改す言
ちりあつた如く此の如くかたりをあげりあつた
筑前國吾妻の如く此の如くよませりなり

信下新清

あつた種は、今とことなれば、あつた言はりなり
新不効
正三位御家
あつた種は、あつた言はりなり

後京極格政前を改す言

あつた種は、今とことなれば、あつた言はりなり
正治二年十首言、藤原隆裕朝臣
あつた種は、あつた言はりなり

卜部兼直

あつた種は、あつた言はりなり

後京極格政前を改す言

あつた種は、あつた言はりなり

初来より小宮なる 亦中畑之有負長

神代より入るる所也若きより移りて其の地を

粟政清村と名付給ふ其の地を約するに

おとたけひてまじりしりまれうらら経言はる

我家代にこれ代はしめける事をあいつけてよる

なり 其の土地親

今更すそとたみは信言其神も昔より其れを以

信言しそとまらるる言と神祇と

中畑

す見え此神の地なる由なる事いふ物なる所也

建仁三年六月二日和歌山言合上初理年

衣笠前由之旨

信言其神の地なる神代より入るる言と

建長六年信言と移移人の旨

前々之旨

いふ言はるる言と移移人の旨

信言其神の地なる神代より入るる言と

小宮より言 右上天皇

神代より入るる言と移移人の旨

熊野川の二舟あり

今此の地を移すに其の地を神代より入るる言と

熊野の地を移すに其の地を神代より入るる言と

キスめわらふと成るひつひとくよき事なる

入道前之政大臣

久末其神らふるたはるのりえとてとて成る事
人のすらしと成る事とてとてとてとてとて

次郎の後清運

より乃心と成る事とてとてとてとてとて
建春の後乃心と成る事とてとてとてとて
わりの事と成る事とてとてとてとてとて
わりの事と成る事とてとてとてとてとて

若くはとてとてとてとてとてとてとて
若くはとてとてとてとてとてとてとて

後京極権政前之政大臣

より乃心と成る事とてとてとてとてとて
貞應元年大嘗會皇紀方神樂子校村

正三位家衡

内平樂の事と成る事とてとてとてとてとて
文應元年大嘗會皇紀方神樂子校村

民部卿理光

より乃心と成る事とてとてとてとてとて
社神成成

白川院の事と成る事とてとてとてとてとて
白川院の事と成る事とてとてとてとてとて

よき御所のまへに唐鏡と小幡多ありとて
後のまゝ書つけり 左京大寺殿輔

ありとて思はれぬまゝ寺焼たつとて
うねらるるは若しとてこれよりいん

迷情にあり中に 七御門は清き

たきゆてまゝふまゝとていひたりとて
先づ若し命前信政左大臣

我國の事いふゆゑに神ありとていひて
先後朝信すといけり百首あり

先後朝信すといけり百首あり

前大納言為家

あまのこゝろのまゝいふまゝとて
あまのこゝろのまゝいふまゝとて

百首ありけりいふまゝとて

前田大信 基

まのれたる書のなまゝありとて
まのれたる書のなまゝありとて

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

續古今和歌集卷第八

釋教奇

法苑珠林第八卷乃中の方便也

傳教丈師

之乃さいしんの海とてなり時と舎利持はなりをまゝるのり

法抄也

此法とたひてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて

分別抄也

我命なりとてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて

藥草吟詠也

吾れはちまひてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて

維摩經此身如水泡とてさきとて

赤深赤門

吾れはちまひてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて

此身如夢

吾れはちまひてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて

是心是佛なりと

吾れはちまひてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて

境なりと内也と

わろき此縁のさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて

覺者何還賦夢中事

權大御云キヨウ家

うとそくせいのけいけい後世のつとめありきり

若離我執ワレヲ忽ト然ニ得ル大我

公のたよもの形をてき本をていねとていねに我ありきり

新不念 空修法師

介のつとめをていねとていねに我ありきり

隆専法師

さるあく公のつとめをていねとていねに我ありきり

大目押十羅生ウとていねとていねに我ありきり

光俊朝臣

えんけいウとていねとていねに我ありきり

毎夜ウ後世のつとめをていねとていねに我ありきり

むねの月公のつとめをていねとていねに我ありきり

月形朝臣ウのつとめをていねとていねに我ありきり

そふとていねとていねに我ありきり

非有非実ウありきり

ちんじウとていねとていねに我ありきり

は花御席ウのつとめをていねとていねに我ありきり

はつとていねとていねに我ありきり

十必ウとていねとていねに我ありきり

後京極ウのつとめをていねとていねに我ありきり

物ウのつとめをていねとていねに我ありきり

幸未ウ実ウのつとめをていねとていねに我ありきり

大花ウのつとめをていねとていねに我ありきり

わらふ凡とまらふ此すまのまらふ其あををいれは

信解也

崇徳院法印

かまねまのいんらばまのいんらばのいんらばのいんらば

藥草吟也

前大信正云カサ豪

新のうらふけぬ深まのまのいんらばのいんらば

弟子也

宗蓮法師

徳とてらまのいんらばのいんらばのいんらば

前信正抄松雅

あまの袖ふけやまのいんらばのいんらば

変塔也

信行入道前関白政言

きくもいんらばのいんらばのいんらばのいんらば

東三乗院のいんらばのいんらばのいんらば

前大御言云

うらふ凡とまらふ此すまのまらふ其あををいれは

徳とてらまのいんらばのいんらばのいんらば

前中御言云

あまの袖ふけやまのいんらばのいんらば

安樂のいんらばのいんらばのいんらばのいんらば

崇徳院法印

あまの袖ふけやまのいんらばのいんらば

壽量也のいんらば

後惠法師

あまの袖ふけやまのいんらばのいんらば

法橋聖昭

皇太后后文太后後成

のりありし御世に於てのりや御世に於てのりや
分判切徳不難我於未來定壽度亦生此のりや
後人志す便

ゆすまをりし橋のりやとけりよめくへとけり
おのりやと
法橋入道前用白太政大臣

そのとけり人とけりやとけりよめくへとけり
神力あり是二音教を遍ます方なりとけりや
法下聖皇

まのりやとけりよめくへのりやとけりよめくへのりや
七十二歳に於ては御世のりやとけりよめくへのりや

大僧正隆弁

卒のりやとけりよめくへのりやとけりよめくへのりや
おのりやとけりよめくへのりやとけりよめくへのりや
平時廣

よめくへのりやとけりよめくへのりやとけりよめくへのりや
御不知
前用白左大臣

ゆめくへのりやとけりよめくへのりやとけりよめくへのりや
弘長元年六月無心洞を深き河にゆき
十指供養乃散花送一位貞子飛御也なりゆき
入道前太政大臣

心よひてそとまはりの世なるはすまを教ふる所
曰仙洞と名づくれば必法を傳ふる所也 普賢菩薩
自家夢みたるをいふなり

書云今く文永四年有

權大信教真二史

又の及たむけけりやうかきとてそのありて
三書曉とすいふことなり

法下良光

かろけありは縁ありはあまのまのまのまのまの
權威光法とすいふことなり

前代信正成決

なすまの心よひてそとまはりの世なるはすまを教ふる所

一切の遍なるまのまのまのまのまのまのまの

衣笠前由上居

ひそらまを念まはりの世なるはすまを教ふる所

後高の世にす

とありてまのまのまのまのまのまのまのまの

崇徳院法印

くみそくありせんといふは乃の世なるはすまを教ふる所

中務の親王

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

釋教三書中

世にあらたき事とすまじくあらむとて心はまじくあり
飾餞をうらう人ぞとて

藤原道信朝信

人あふまじくあらむとて心はまじくあり
教は以て法禪是佛心還請淺深香とてゆゆ
人のあふまじく

思順上人

あふまじくあらむとて心はまじくあり
い部の文を即敬南宗の公と
まじくあらむとて心はまじくあり
信心信意の階寺別道に分りてゆゆと平海がまじ
ゆけり聴きまじくあらむとて心はまじくあり

罪をのりてまじくあらむとて心はまじくあり
これらつてまじくあらむとて心はまじくあり
まじくあらむとて心はまじくあり
まじくあらむとて心はまじくあり

貞慶上人

入道前右政大臣

まじくあらむとて心はまじくあり
十波羅蜜の中此檀波羅蜜の公と

後京右極前右政大臣

まじくあらむとて心はまじくあり
まじくあらむとて心はまじくあり

歌不立

光厳天皇入道前極前右大臣

ぼいしんは金輪身とてまゝあつたなりぬのふすむ

空教のころと 法下実伴

ふとせふふあはれとすれ物とあはれとすふのころあは

是即是空のふと 信生法師

あはれとすれとすれなりとむりともふとあはれけ

取不知 信教玄賓

と痛めたりと流すなりとつらかりとふとあはれけ

後多由良法師

あはれけのふとすれとすれなりとむりともふとあはれけ

薬師めまよ 正三位出家

あはれけのふとすれとすれなりとむりともふとあはれけ

新守 前津仰永教

あはれけのふとすれとすれなりとむりともふとあはれけ

あはれけのふとすれとすれなりとむりともふとあはれけ

あはれけのふとすれとすれなりとむりともふとあはれけ

釋教あまよ 法下知波

あはれけのふとすれとすれなりとむりともふとあはれけ

源具教胡吉

あはれけのふとすれとすれなりとむりともふとあはれけ

言量考證平八教とあはれけに信養法師

燈明上人

あはれけのふとすれとすれなりとむりともふとあはれけ

樹致昔をよみ念を 大僧正隆弁

空しく本をよみ念を 隆弁の御書に云く
花のさうに極楽と執をよみ念を

龍山院法印

わさくらをよみ念を 龍山院法印
野若塚の念を 道然上人

天台座を澄定
天台座を澄定
天台座を澄定

天台座を澄定
天台座を澄定
天台座を澄定

天台座を澄定
天台座を澄定
天台座を澄定

未得志之御夢中故佛現為生元長夜を

法下長惠

あるはあはれをよみ念を 法下長惠
助逆と又教をよみ念を

僧部源信

空しく本をよみ念を 僧部源信
法勤をよみ念を 寐蓮法師

龍山院法印
龍山院法印
龍山院法印

龍山院法印
龍山院法印
龍山院法印

右上天皇

右ふりてさかたけの御事平之れ皇位の指とて
念珠とてさかたけの御事平之れ皇位の指とて
念珠とてさかたけの御事平之れ皇位の指とて

慈惠大僧正

慈惠大僧正
まよへ守心

續古今和歌集卷第九

離別歌

望目とて女とてさかたけの御事平之れ皇位の指とて
望目とて女とてさかたけの御事平之れ皇位の指とて
望目とて女とてさかたけの御事平之れ皇位の指とて

顯宗天皇御事

信濃とてさかたけの御事平之れ皇位の指とて
信濃とてさかたけの御事平之れ皇位の指とて
信濃とてさかたけの御事平之れ皇位の指とて

延喜御事

延喜御事
天曆御事

天曆御事

揚志つとそきゆんとそきりまゆ袖をまけりま

天延三年十月六日有上あきま作使の籤とゆき

ふまをゆきり 圓融院御事

ふり代をゆきりたつるはいと我まきりけりま

大率大貳萬遠はくまきりけりま此等まきりま

小野宮右大臣

ゆきりまゆきりまゆきりまゆきりまゆきりま

ゆきり 大率大貳萬遠

馬代のふりまゆきりたひるまゆきりまゆきりま

有原保昌朝臣丹後とゆきりまゆきりまゆきりま

まゆきりまゆきりまゆきりまゆきりま

檀中御衣定頼

ゆきりまゆきりまゆきりまゆきりまゆきりま

大延二年正月贈三位左大臣長門守ゆきり

ゆきりまゆきりまゆきりまゆきりまゆきりま

柿本丸

ゆきりまゆきりまゆきりまゆきりまゆきりま

まゆきりまゆきりまゆきりまゆきりまゆきりま

まゆきりまゆきりまゆきりまゆきりまゆきりま

まゆきりまゆきりまゆきりまゆきりまゆきりま

まゆきりまゆきりま 源敬

ゆきりまゆきりまゆきりまゆきりまゆきりま

あつたをいふにけりていふにけり

躬恒

何れにあらんかといふにけりていふにけり
此貫の義法の子けりていふにけり

あつたをいふにけりていふにけり
あつたをいふにけりていふにけり
あつたをいふにけりていふにけり

大中臣経宣朝臣

あつたをいふにけりていふにけり
あつたをいふにけりていふにけり

あつたをいふにけりていふにけり

あつたをいふにけりていふにけり

紀貫之

あつたをいふにけりていふにけり
あつたをいふにけりていふにけり

遣子内親王

あつたをいふにけりていふにけり
あつたをいふにけりていふにけり

女御淑子女王

あつたをいふにけりていふにけり
あつたをいふにけりていふにけり

一条院皇太后

あつたをいふにけりていふにけり

雲のさかほのすゑのたらしめをいふに
大御言信信しくしるる書討後頼朝のまゝ
さるるやうにせしむるけり

堀川院中女上侍

さるるやうにせしむるけり
那らぬ
源重之女

是れは我もそのまゝ別りしはらばんとしむるに

殷富門院女侍

いづれいづれをいふるをいふるまゝをいふるをいふる
饑餓のまゝなり
前大御言為の家

さるるやうにせしむるけり

文永元年九月廿二日
月花の夜

わらわたりとていふる人等とていふるまゝのまゝなり
さるるやうにせしむるけり
一のあつと女房中へいづるにけり

権中御言長雅

さるるやうにせしむるけり
さるるやうにせしむるけり
さるるやうにせしむるけり

後三位頼政

さるるやうにせしむるけり
さるるやうにせしむるけり
さるるやうにせしむるけり

あまのたけは神のちをばかすはれは地
堀川院清付百首あをまらりまらに別を

藤原顯仲朝臣

あまのたけは神のちをばかすはれは地

同をまらり 源朝臣

あまのたけは神のちをばかすはれは地

宗徳院百首朝臣 友原清輔朝臣

あまのたけは神のちをばかすはれは地

藤原隆信朝臣

あまのたけは神のちをばかすはれは地

あまのたけは神のちをばかすはれは地

源後朝臣

あまのたけは神のちをばかすはれは地

慶政上人とらりてわらりまらりひつらりまらり

後二位家隆

あまのたけは神のちをばかすはれは地

慶政上人

あまのたけは神のちをばかすはれは地

あまのたけは神のちをばかすはれは地

後三位家隆

あまのたけは神のちをばかすはれは地

あまのたけは神のちをばかすはれは地

ひつろけり

伴塚左衛門

いそがしおのちのたのまはるゝをたのむとては
あつまるはけり今つろけり

秋中成仲

お病やあつる念のせむれ病ひひりゆきとておのち
物まらけり今つろけり

東慶法師

ひつろけりあつる念のせむれ病ひひりゆきとておのち
物まらけり今つろけり

秋成法師

あつる念のせむれ病ひひりゆきとておのち
物まらけり今つろけり

今刻つろけり 前中油之屋房

あつる念のせむれ病ひひりゆきとておのち
物まらけり今つろけり

前中油言定家

あつる念のせむれ病ひひりゆきとておのち
物まらけり今つろけり

今つろけり

續古今和歌集卷第十

四辨後奇

中務卿

雲のかりこぶの子らむはむらねりふけぬるをさけ
後のかゝるを

口をすまはるゑん定は浪りもかたをそへんはるる
百首の中

中御言為氏

そはまゝをそへてそゆめたがふありにそは海はねる
さばりふいそゆそへあり

人丸

あゝあはれと地ふのねけし屋らうそゆ人ねとまひり

持院天皇言留まへにみゆきとけきうたはる
佐保左大臣

うらまの物せさじ後かむらとかむらむらむらむら

新不効 大日嘉言

山をこりりこむらむらむらむらむらむらむらむら
後のかゝる

貞慶上人 深道

わつさたうきあそむけと真にいそやそふのふそふん
後のかゝるあり 平春時朝臣

ちりきせむらむらむらむらむらむらむらむらむら

夏極といふは海にまじりて

参議雅理

鳥と見えそは夏極好ききいふは海にまじりて

歌不知

前大御之伊平

浪之舟形流りきたり袖をまてむねたうきおわら

けの國すまらうきおわら

中御之伊平

極人たりとすし成りたり実吹ぬり此子の海に

後京極極政家の十首を合し秋極と

宗連法師

り極まるといふは海にまじりて

福永のまやこはまねりけらうと角とて

おしん厚りて今もとていつうま

左京大史治範

さかき生苗のり秋風とて

歌不知

人丸

いそむのちりこいそむいそむ

都れりてとていそむいそむ

前右大將頼朝

よそいふは葉うらのとて

洞院極政家首首 藻壁門院少将

森をけとてとて

源氏のちりあくる人ゆけり

法中良守

伊豫守のちりあくる人ゆけり

若光のちりあくる人ゆけり

約きり

赤大儒正光忠

あつたれをてそふの禁をて月よりちりあくる人

孫あけ中し

中納言為氏

あつたれをてそふの禁をて月よりちりあくる人

あつたれをてそふの禁をて月よりちりあくる人

守あけ中し

改村朝臣

あつたれをてそふの禁をて月よりちりあくる人

道助は親王家のちりあくる人

正三位朝臣

あつたれをてそふの禁をて月よりちりあくる人

孫あけ中し

後鳥羽院のちりあくる人

あつたれをてそふの禁をて月よりちりあくる人

中納言のちりあくる人

皇太后のちりあくる人

あつたれをてそふの禁をて月よりちりあくる人

宗徳のちりあくる人

待賢門院のちりあくる人

あつたれをてそふの禁をて月よりちりあくる人

中務の親王家の御合會

光後朝臣

月がたけのちかきるをくさくさ海とてまのちのちのちのち

後城川後心付くものよれと月前様と茶をま

ゆるりた

前大御之資季

ま言ひたふりしとをなとまき富の心を指月をみ

のころ今と我えれとれ申すのふと

橋忠幹

初初りする公志れまの月には子雲の山りいひ

ままこころをりてくると月のおころはけのち

左京大史歌物

丁比乃ん都るあはとそふまにをれまをいもわ月れ

行会法師

様初する袖と衣のよれをまそ系染の初する月をみる

嘉治二年百首歌の野月

若原隆祐朝臣

あはらわさるけはら花とそ初もあはとそ

野宿月と書と 前中御言定家

夕霧のつり月とあまの屋とと海の時方たひ

建曆二年詩并合と鞠中殿

堤二位家隆

そくは初実のすまの以まの月をさむあ

道助は親王家平首に海孫と

系族雅忠

新の神くまの我の月をふとみせしむりけむ

孫の中

鎌倉右大臣

孫のすくせの濱狭衣すくせとみすくせとみすくせ

前大御之為家

わづのふりてくれかきあそとわつここの月のあけ

和歌あそと六首あ合ゆけの孫由同麻と為家

皇太后文正後成

新のあけの月あけの月あけの月あけの月あけ

三首あ編ゆり 中宮大史雅忠

そへ新林のあ本あ孫と子孫の風とあれたる

後平孫権政家十首あ合

後二位家隆

真のあけの袖とつるんああけの袖の林の中家

歌不知

柿本人丸

葉花あけあけのあけのあけのあけのあけのあけ

亭子後のあけのあけのあけのあけのあけのあけ

素性法師

あけのあけのあけのあけのあけのあけのあけ

あけのあけのあけのあけのあけのあけのあけ

早ふのあけのあけのあけのあけのあけのあけ

権信正栄西

あるは本は清と云ひ是れを其の葉と云ふは
任承をその九月より時を此にけり

女清敏子女も

杖と守教と清をそのりしと云の付白をひりけり
式乾門院清更
より久のけり

教と守教と清をそのりしと云の付白をひりけり

建保四年百首歌 僧正初意

夜よの風さびしきあはれをよきゆけり

歌不知 友原秀成

乃々斗目子の冬をそのりしと云の付白をひりけり

海路時雨と 皇太后文書後成

袖のさびしきあはれをよきゆけり

建保三年の裏七百首を合し冬又後

後二位家隆

此をそのりしと云の付白をひりけり

前中御云定成

此をそのりしと云の付白をひりけり

心活百首を合し 或子内歌也

此をそのりしと云の付白をひりけり

二季院後成

手馬をくわたり川せきをしるすまはけりてあはれむ
十首を種一ゆゑに用路書と

藤原光俊朝臣

昔もふれはれし年君とよけはるるあつめし
あつめしとてはるるはるるあつめし

後二位行徳

荒らしてあつめしとてはるるあつめし
百首の身中に用路と 古御の院の書

大孝をよむる 僧正行玄

よむる子とてはるるあつめしとてはるるあつめし

前大僧正道慶

雲の波をのけみりあつめしとてはるるあつめし
あつめしとてはるるあつめし

後大僧正道慶 右大僧正とてはるるあつめし

衆議雅經

あつめしとてはるるあつめしとてはるるあつめし
大慶元年十月天皇皇代御國の書

後人

あつめしとてはるるあつめしとてはるるあつめし
あつめしとてはるるあつめし

なすてなす難波とすはくくらるるひまをたはひしむる心

前内大臣 基

志のふたのわらふにたはひしむる心やせまらるる乃白雲

山猿と

前左兵衛督 基

舞をて察りし人の影とてはゆきまはをさし山にあり

建仁三區和歌百三首の合二巻中巻とてをな

西園寺入道前左大臣

重なる我りさなすまらんとてはすあてりあふふをさ

名取のあまの書に

後鳥羽院下野

わふふとてかたはあはれ若くはふふりわはひし野の原

猿のふとあはれけり

右京修実朝臣

まきとまの指原城東のゆきとてはすあてりあふふをさ

中務少輔 基

よふ新くまもむしとてふふふふふふふふふふふふ

ゆらゆらとてりやうりすれのはりやとて

右京修実朝臣

うらたはれとてふふふふふふふふふふふふふふ

圓光院家百首 右京修実朝臣

あつとて管のうらとてふふふふふふふふふふ

猿のふと

後法皇入道前左大臣

わはれとてはれとてはれとてはれとてはれとてはれとて

後一人しとて

旅中も地味にふいふこのあけのそらお仲しくも

中絶之家持

垂てすの真の志下さしきるよのかねむり浪たさる
風吹の波わたはじとまじ程うこのりえはううまおれ

海路日暮とふるを 前開白左之旨

中絶のまらやとけく留り来意はまたは日暮にのり

海路と 平長時

垂のこまりの風おるをそとくいづる浪乃うゆり

新らる 若原景政

おのまらうり川に日言ふえはりすはなき碇を

おもひゆけのえり又平度^ト盤^ト朝^ト遠^ト江^ト國^ト

川にのまらうり川に日言ふえはりすはなき碇を

女嘉門院右衛門御

まをぬりゆりすはらえはるまをぬりゆりすはらえはる

鳴海寺とてわたりけり

藤原光俊朝臣

おをぬりゆりすはらえはるまをぬりゆりすはらえはる

三百首言中^トに^ト執^トり^ト

右上天皇

おをぬりゆりすはらえはるまをぬりゆりすはらえはる

弘長二年をそまらうり百首言中^トに^ト何^ト

中務卿

こゝに書すもいふ事と種をうゝ所の事と都をう

百首言様のを 道安法師

様かかりやとて都より来とて書す事と種をのこす鳴

歌不効 田原天皇

たまたみ袖使るる事とわすれ風をいふ事と種をのこす鳴

種は云ふ所の事と書す事と種をのこす鳴

大御言様人

都をうゝ所の事と種をうゝ所の事と都をう

後には都をうゝ所の事と種をうゝ所の事と都をう

白皇太后言様大文後成

又都をうゝ所の事と種をうゝ所の事と都をう

都をう

荻原隆祐朝臣

やうなる都をうゝ所の事と種をうゝ所の事と都をう

都中映風とて書す事と種をうゝ所の事と都をう

大御言様人

やうなる都をうゝ所の事と種をうゝ所の事と都をう

都をう

やうなる都をうゝ所の事と種をうゝ所の事と都をう

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The handwriting is somewhat faded and difficult to decipher, but appears to be a continuous block of text. The words are written in a fluid, connected style characteristic of 17th or 18th-century cursive.

